

オ○ニーを録音され脅された既婚妻が隣人の枯れオジに調教され
依存確定まで堕ちる話【一話／三話完結版】

サンプル（一部抜粋）

「今夜：よろしく。」

いつもより少し甘い行ってらっしゃいのキス。

夫がそう言った日の夜、私は必ず抱かれる。

結婚から三年、夫は浮気もしないし、定期的にこうして誘ってくれる。

きつと愛されているんだろうなと思う。

ただ：夫は知らない。

夫とのセックスで私がいつもどれほど、虚しくなるのかを。

夫はいつも五分で終わる。

私が気持ちよくなる前に彼はイってしまい、お腹の上に精子をぶちまけて眠る。

余韻なんてものはなく、吐き捨てられた残骸をティッシュでぬぐい、シャワーを浴びる。
それがルーティンだ。

「…はあ。」

そんな私は…一人でスる事でしか満足できない。

だって満足できないからって、外で発散する訳にもいかないし、
そもそも夫を裏切りたくもない…。

スマホを片手に『クンニ』と打ち込み、音量を上げて再生する。
画面の中の舌の動きに合わせて、自分のクリトリスをなぞった。

「…っ、う…は…：…♡あ…」

もう少しでイけそう…

そう思ったタイミングで、インターホンが鳴った。

「はい」

「…隣の新庄ですが。」

「聞こえてますよ？」

半ば強引に入ってきたのは、人畜無害な見た目の枯れたおじさんというイメージしかなかった隣人だった。

「窓、全開なのに何をしていたんです？」

掃除の前にシたせいで、窓を閉め忘れていた。

気付いた瞬間、恥ずかしさが押し寄せた。

「…クンニ、されるの好きなんだ？」

「指、まだ濡れてるよ。」

さっきまで自分で触ってた証拠だね」

新庄さんの手が、私の手を掴む。

「実はね、さっき奥さんの声が聞こえてきて：思わず録音しちゃったんだよね」
録音をバラまかたくなければ、少し楽しませてほしい。

そう脅され、私は彼に従うしかなかった。

新庄さんの乾燥した指が、ブラの中に滑り込む。

「乳首、立ったままだ。こんなおじさんに脅されて触られているのに、
声が出るくらい気持ちいいんだ？」

「別：に：っ：」

新庄さんは私のスカートの中に手を入れ、下着をずらした。

「声、漏れてるよ。ほら、もっと我慢して」

じゅるり、と粘り気のある音が静まり返ったリビングに響く。

夫の行為では感じたことのない、執拗な愛撫。

五分が経つ頃には、私は自ら彼の舌を求めるように両足を大きく開いていた。

「新庄さ：ん♡あ：はあ、ダメ、それ：♡♡

やだ、ん、イっちゃう……！」

イきたい。

そう思った瞬間、新庄さんはスッと指を抜いた。

「なん…で…」

「…おじさんにあんなに舐められて…喜んじやうんだ。

舐めてほしいなら、もっとよく見えるように足を開いて」

屈辱に震えながら、私は黙って足を大きく開いた。

「指と舌でイかせて…お願いです、もうイきたいっ」

「よくできました」

新庄さんの舌がクリトリスを吸い、指が中を満たす。

「ああああ……!!」

ん♡♡は、気持ちいい…♡あ、う、ん♡♡ああ♡」

激しく動く指と、吸いつく唇。

プシャッと音を立てて、私は床を潮で濡らした。

夫の脱ぎ捨てたスウェットを新庄さんが手に取り、私の潮を拭う。

「…2回目もすごい潮だね。」

「次、だよ」

何度も何度も絶頂を強制され、私はもう夫のことすら思い出せないほどに溶けていた。

「…中、僕のでいっばいだ」

新庄さんの熱い塊が最奥に注がれる。

お腹の上に吐き捨てられる夫の冷たいものとは違う、私を満たす熱。

「自分がどれだけ最低な事をしたのか、されたのか…

それをきちんと自覚した君を、僕はまた明日抱きに来るから」

そう言い残して新庄さんは去った。

その夜、新庄さんに抱かれた熱を打ち消そうと夫に抱きついた。

「…もしかして早くしたい？」

「え？」

「いや、さつきからなんだか色っぽい気がするから。」

「…う、うん、早く…したい…」

「…なんか今の顔、エロい。」

夫はスイッチが入ったのか、夕飯すらも食わずに精力剤を一気飲みして私を抱き寄せた。たった五分…。

私はお腹の上で白く濁って冷えていく塊を、ティッシュで無造作に拭い去った。

私…ただのゴミ箱みたい。

新庄さんのは私の奥で…あんなに熱かったのに。

夫の愛情は私の肌の上を滑り落ちて、乾いた紙に吸い込まれて消えていく…。満足感もなく虚しいと感じるのは…いつも通りだった。

でもいつもより…悲しかった。

否定したかった。

愛のあるセックスは気持ちいいと。

…新庄さんなんてどうでもいい、あんな熱は錯覚だったと確信したかった。

新庄さんを知らなければ、こんな風に比較したりする事も無かったのに…

快楽に溺れた裏切りは一生私から消えないのだと気付いてしまった。

明日、きっと新庄さんは家にくるんだろう。

でも…もう受け入れたりしない。

これ以上、新庄さんを知って夫とのセックスに絶望したくなかった…。

「奥さん。昨日は申し訳なかった…これ、お詫びの品」

そこには昨日、私をめちゃくちゃにした狂気を感じさせない

いつもの穏やかな新庄さんが立っていた。

「…壁、薄いよね。昨日も短かったでしょ。」

ガタガタと激しい音だけが響いて、奥さんの声が聞こえてこなかった。」

「僕とした時は、あんなに乱れていたのに」

新庄さんは私の手首を掴み、そのままりビングのソファへと私を誘う。

「同じ場所で、奥さんの身体に教えてあげよう。どれだけ気持ちよくなれるのか」
一度「本物」を知ってしまった身体は、もう戻れない。

私は、新庄さんの指と舌、そして夫とは比べ物にならないほど大きく太い「ソレ」を、自分から求めるように――。

「あの時、君が窓を開けて一人でシてくれてよかった。」

「もう三年。やっただ。」

…全て、こうなると思っていたよ。」

新庄さんはぼそっとそう言いながら、両手で私の頬を包みキスをした。

新庄さんの執着が明らかに…？

全容は製品版にて。